ＮＺ・ブルースとリレーションシップ契約

HONDA HEAT

GM 兼監督　伊藤英章

日本ラグビーフットボール協会 90 周年、誠におめでとう御座います。長きに渡り日本のラグビーを支えてこられた諸先輩の方々に敬意を表します。

振り返りますと、関東・関西・九州の各地域協会にて社会人ラグビーリーグが行われ、勝ち進むと全国大会、そして日本選手権といったフォーマットでしたが、2003 年にこれらを統合する〝ジャパンラグビートップリーグ〟が発足しました。新たなリーグを立ち上げるといった並々ならぬ知恵と努力に感謝申し上げます。

2003 年当時、我々 Honda HEAT は、トップウエストリーグの中でも低迷しておりました。

2004 年に社内でラグビー部を強化し、日本最高峰のトップリーグを目指すという目標を掲げ、3 年連続トップリーグとの入れ替え戦に挑みましたが、厚い壁に跳ね返されてきました。

そんな中、ようやく 2008 年にトップリーグへの自動昇格を掴み取り、翌 2009 年には初めてトップリーグの舞台で戦う事が出来ましたが、結果 14 チーム中 13 位 (1 勝)、僅か 1 年での自動降格となってしまいました。

2011 年、再度トップリーグで戦うも順位も変わらず 2 度目の自動降格 (2 勝 1 分)。

その後は 2 年間の躓きもありましたが、2014 年のトップチャレンジシリーズで 1 位の座を掴み取り自動昇格、翌 2015 年には

2015 年初のトップリーグ残留を決める

ブルースによるハカ

ブルース戦

3度目のトップリーグでのチャレンジで16チーム中11位(3勝)となり、初のトップリーグ残留を果たしました。社内でもラグビー部への関心が高まり、大いに盛り上がりました。

しかし翌2016年は、16チーム中最下位(1勝)となり、自動降格といった最悪の結果を招いてしまい、チーム造りの難しさを痛感させられました。

現在、2019年のラグビーワールドカップを目の前に、まずはトップリーグ昇格を目指して、新たなリーグであるトップチャレンジリーグに挑戦します。

2017年からは、将来を見据えたチーム強化として、スーパーラグビーでもお馴染みのニュージーランドのブルースと手を組み、リレーションシップ契約を結びました。

この取り組みは、コーチング及びマネジメントのスキルアップ、選手やコーチの留学の一元化、チームの進捗管理、強化試合や合同合宿等、多岐に渡る契約となっており、プロチームのノウハウを学べるものとしてスタートしました。そして7月には、Honda HEATのホームグラウンドで約一週間の合同キャンプを行い、ブルースの選手やスタッフと共に、地元のラグビースクールや高校生へのラグビークリニック、更には国内強豪大学の選手にも声を掛け指導を行いました。そして7月8日には、プラウドパートナーズマッチ(誇れる仲間達との試合)と題し、ブルース対Honda HEATの交流試合を実現させました。試合に先立ち代表者による挨拶とジャージ交換、キックオフ前にはブルースがハカを披露してくれ、会場は最高の盛り上がりとなりました。

前半は、我がHonda HEATも鋭いタックルと粘りのディフェンスで12―12の同点で折り返しましたが、後半はブルースの地力が勝り突き放され、最終スコア17―52での敗戦となりました。

試合後は、ご来場頂いた観客の皆様にグラウンドに入って頂き、両チームの選手やスタッフとの交流の場として時間を設け、サインや握手、撮影を行い最高の地域貢献が出来たと思っています。

ブルースとのリレーションシップは数年続ける予定であり、プロチームのノウハウを学びながらHonda HEATのチーム強化を図って行きます。そこには、Honda HEATを応援してくれるサポーターの皆様の笑顔と未来のラガーマン達の夢がセットになったイベントを展開していきます。

そしてトップリーグでの残留、定着、常勝チーム、日本一を目指し、チーム一丸となって精進して参ります。

これまで応援して下さったサポーターの皆様、有難う御座います。そしてこれからも変わらぬ熱いご声援を宜しくお願い致します。

最後に常日頃よりお世話になっております関西ラグビーフットボール協会、三重県ラグビーフットボール協会の皆様、誠に有難う御座います。

また練習試合や公式戦でお世話になっております大学チーム、企業チーム関係者の皆様へも感謝申し上げます。

ブルース戦の記念撮影

ブルースと鈴鹿ラグビースクールとのふれあい

ブルースによる大学生指導

ブルースによる高校生指導

地域から愛されるラグビーチームに

リコー ブラックラムズ

ラグビー部長　藤本　恭一郎

この度は、公益財団法人日本ラグビーフットボール協会が創設 90 周年を迎えられましたことをお祝い申し上げます。関係者の皆様のラグビー界に対する永きに亘るご尽力に深く敬意を表します。

本年で 15 度目の開幕を迎えることになるジャパンラグビートップリーグ（以下、トップリーグ）に、私たちリコーラグビー部は、「リコーブラックラムズ」として 2003 年度の創設初年度から挑んでまいりました。トップイーストリーグ 11 で戦うことになった 2008 年度を除く、13 シーズンを日本最高峰の舞台で戦わせていただいたことになります。

リコーラグビー部は、1953（昭和 28）年に旧社名・理研光学工業の王子工場で同好会として創設されました。「良き社会人であれ」「仕事とラグビーの両立」といった理念として掲げながら研鑽を重ね、創設から 17 年後の 1970 年、全国社会人ラグビーフットボール大会での初優勝を果たしました。さらに 1972 年、1973 年は連覇し、また日本選手

権の栄冠も２年続けて勝ち取ることができました。

しかし、その後は 1992 年に東日本社会人リーグ優勝を果たしたものの、全国社会人大会ではベスト４という壁を越えられぬまま約 30 年の時が流れ、「復活」を目標に掲げた期間が長く続くこととなりました。

2003 年度のトップリーグ創設という節目は、そうした状況で訪れたものであります。体制の転換に刺激を受け、チーム間の競争は目に見えて激化し、私たちリコーラグビー部の「復活」はさらに遠のくこととなりました。初年度より９位（３勝８敗）、10 位（４勝７敗）、11 位（２勝９敗）、11 位（４勝９敗）と上位浮上は叶わず、４シーズン続けて入れ替え戦に出場する苦しいシーズンが続きました。

そして５度目のシーズンとなった 2007 年度は、開幕戦に勝利したものの、その後７連敗を喫し、第12節の九州電力キューデンヴォルテクス戦に 17 対 20 で惜敗すると、同節をもって自動降格が決定しました。最終成績は 13 位（３勝 10 敗）でした。

この降格は、私たちにトップリーグという日本最高峰の舞台で戦うことの重みを改めて考え直させる機会となりました。翌 2008 年度、チームは自分たちの“姿勢”をもう一度見直し、また豪州代表のスタンドオフとして世界一を経験したスティーブン・ラーカムを迎え、戦力的、また精神的な支柱として再建に取り組みました。そしてトップイーストリーグ 11 を 10 戦全勝、トップチャレンジも連勝で制し、１シーズンでトップリーグ復帰を達成。さらには日本選手権出場というチャンスもつかむと、この大舞台で２度勝ち抜き、４強入りを果たすことができました。このシーズンは、チームにとって大きな転機となるものだったと思います。

トップリーグ復帰後の８シーズンは、一段ずつではありますが、階段を上っていくことができたと感じております。2009 年度は 12 位（４勝９敗）に終わったものの、2010 年度は６勝７敗、2011 年度は７勝５敗１分と過去最多勝利数を続けて更新し、順位も２年連続で７位を記録しました。その後は少々足踏みが続きましたが、チームとしては確実に力を蓄え、昨年度は６位（８勝７敗）と、トップリーグでの過去最高順位と勝利数を記録することができました。さらには、No. 8 松橋周平がチームからは初となるトップリーグ新人賞とベストフィフティーンに選出されるという栄誉にもあずかりました。

「優れた選手は多くいるが、力を発揮しきれない」。長らくそのようにご批評いただくことも多かった私たちではありますが、昨シーズンはチームがスローガンとして掲げた「ALL OUT」を実践し、力を出し切ることができたと自負しております。選手はもちろん、

苦しんだトップリーグ創設直後や降格を知る世代が多くを占めるチームスタッフ、そして何よりも苦しい時代から応援を続けてくれた社員やファンの皆様の思いが実を結んだものでありました。

もちろん、真の目標はまだまだ先にあります。私たちはまだ「復活」を果たしておりません。トップリーグには、これまでの 14 シーズンで 23 ものチームが挑みながら、優勝杯を手にしたことがあるのはわずか４チームのみです。リーグが盛り上がり、さらなる発展を果たすためには、この状況を打破する新たな力も必要でありましょう。そうした役割を果たせるチームを目指して、これからも研鑽に励んで参ります。

グラウンド外におきましても、スタジアムに来場いただいたお客さまに、観戦や応援をいかに楽しんでいただくかの追求も続けております。昨年度はリコーが自社開発したデジタル技術を用いた「スタンプラリー」「スロット抽選会」を実施いたしましたが、そうした施策を評価いただき、トップリーグよりベストファンサービス賞を頂戴したことも我々の大きなモチベーションとなりました。

2019 年のラグビーワールドカップ日本開催、2020 年の東京五輪を控えております中で、ラグビーの普及活動にもこれまで以上に注力して参ります。選手たち自身の普及活動に対する熱意にも高まりを感じております。さらに地域から愛されるラグビーチームになっていくことを通じても、トップリーグの発展に寄与していければと考えております。

この度は「90 年史」の貴重な紙面を私たちリコーラグビー部に割り当てていただきましたことに感謝を申し上げます。100 周年に向けて、協会のさらなる発展をご祈念いたします。

ラグビー文化が日本に根付き、拡がることこそ

ＮＥＣグリーンロケッツ

部長　在国寺　雅司

この度、日本ラグビーフットボール協会が創立 90 周年、またジャパンラグビートップリーグが 15 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

90 年という長きに亘り、ラグビーの発展に努められた歴代の協会関係者の皆様、また日本ラグビー界の更なる発展のために設立されたトップリーグで、最高レベルの競技が繰り広げられる環境づくりに尽力されているトップリーグ関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

近年のラグビー界の変化には目を見張るものがあります。ラグビー経験のない私にとっては、以前は日本選手権や大学選手権など、ラグビーは冬の恒例行事であり、試合で選手が倒れると「魔法の水」をかけると元気になるという屈強な男性が戦うイメージが強い競技でした。しかし時代の変化、そしてトップリーグの発足と軌を一にして国際化が進展し、最高峰の地域に属する指導者・選手が日本で活躍することが増えることで日本人関係者・選手の視野が広がり、日本人選手が海外でプレーする機会も増え、また試合における戦術や選手の体調管理等における科学的な取り組みによって競技レベルが向上しています。そして女子ラグビーや 7 人制ラグビーなどの競技の多様化によりラグビーがより身近なものになり、またスーパーラグビーへの参入で、季節に関わらずラグビーを楽しむことが可能になることで、ラグビーに接する機会が増えています。協会・チームの関係者が時代を捉えた対応を取られたことでラグビー界が活性化し、2015 年ワールドカップでの日本代表の躍進、そして 2019 年の日本大会開催という着実なステップアップに繋がっています。

NEC グリーンロケッツは、日本選手権やマイクロソフトカップでの優勝経験はありますが、残念ながらトップリーグでの優勝は果たせていません。のみならず、この 15 年間には非常に厳しい成績で終わったシーズンもありました。しかし発足以来トップリーグに在籍していることに強い誇りを持ち、選手をはじめチーム関係者が一丸となって強化に取り組み、現在もそしてこれからも優勝を目指して活動していきます。

ラグビーには激しい接触があり怪我も多い競技です。だからこそチームメンバーに、そして相手チーム・選手に対して敬意を持つことが重要です。「One for all, all for one」「No side」などラグビーが持つ精神を広げることは、トップリーグのチームを持つ企業として重要なことだと考えています。小学校へ出向いてのタグラグビー教室、また「NEC 杯千葉県ラグビースクールトーナメント大会」と称する小学生の大会は 2017 年に 13 回目を数え、約 1000 名の小学生プレーヤーが集まり、地域社会の活性化、ラグビーの普及・育成に貢献していると自負しています。

2019 年のラグビーワールドカップ日本大会では日本代表の活躍を期待するのはもちろんですが、主催国として日本代表以外の試合においても会場を観衆で一杯にすることが、ラグビーに携わる者全てが力を合わせて取り組まなければいけないことです。またワールドカップ終了後には、トップリーグは今以上に競技水準を上げてスポーツとしての魅力を発信し続けるとともに、試合会場のみならず社会貢献活動などを通じてラグビーに対する認知度を高めていくことが、トップリーグに加盟するチームとして重要であり関係者と協力しながら実行していきます。

昨今、ラグビーに対する注目度が上がって、熱烈なファンが増えていることは確かです。しかし反面、「ルールが難しくて分からない」という人が多いのも事実です。いろいろな競技と比較されますが、激しい競技ゆえに試合数を他競技並に増加させることも現実的ではありません。認知度を高めるためには大イベントのような特効薬だけでは長続きしません。これからも協会・加盟チームが一体となって、着実にラグビー文化が日本に根付き、拡がることに力を合わせていきましょう。

ラグビーを通じて夢と感動を創る

NTT ドコモレッド ハリケーンズ

ジャパントップリーグ 15 年目を迎え、大変喜ばしく心よりお祝い申し上げます。

また、日本ラグビーフットボール協会の皆さまにおかれましては、ジャパントップリーグの運営にご尽力頂き、心より感謝申し上げます。

NTT ドコモレッドハリケーンズは、2011-2012 シーズンに念願のトップリーグ昇格を果たし、2015-2016 シーズンまで 5 年間在籍しておりましたが、昇格直後から、トップリーグのレベルについていくのがやっとというシーズンが続きました。

そのうち 4 シーズンで入替戦に出場し、3 回は接戦で勝利し踏みとどまることができましたが、4 回目の入替戦ではとうとう降格となり、本当に悔しく苦い経験を味わいました。

その悔しさを糧に、昨シーズンは、再昇格を目標とするのではなく、再昇格後にトップリーグで勝てるチーム作りに取り組みました。

その甲斐あり、トップリーグ 15 年目の重要なシーズンに、その土俵に立つことができます。

今シーズンは、今までとはひと味もふた味も違ったレッドハリケーンズをお見せしたいと思います。

チーム創設 24 年目を迎えるシーズンとなりますが、今シーズンは上位進出をめざします。

（各チームもご覧になられますので、具体的な数字は控えておきます・笑）

「Return To Action」をスローガンに掲げ、トップリーグに戻って来たことを誇りに思い、昨シーズン取り組んだことや、これから行うすべての取り組みをトップリーグ仕様にレベルアップし、立ち止まることなく次々とアクションし続けて行くことで、必ずこの目標も達成できます。

チームとしてはまだまだ発展途上ではありますが、その分「伸びシロ」も大きいチームです。

レッドハリケーンズ旋風を巻き起こし、リーグ全体を盛り上げ、日本ラグビーの発展に寄与できるよう精進してまいります。

併せて、チーム理念である「私たちはラグビーを通じて夢と感動を創り、社会に貢献できる人間となる」を実践すべく、年間約 50 回のラグビー普及活動を実施しております。

今年も引き続き、ラグビー普及活動、地域貢献活動を積極的に行うことで、来たる 2019 年ラグビーワールドカップへ向けた盛り上がりの一助になれるよう、努力してまいります。

最後になりますが、日本ラグビー界、ジャパントップリーグの益々の発展とトップリーグチームの皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

リーグ最小兵　SH 秦選手（152 ｃｍ、53kg）がトップリーグで躍動します

サンウルブズでも活躍する SO フィルヨーン選手

2016-2017 トップチャレンジ 1 三菱重工相模原戦で再昇格を決めて

夢・授業」の模様。ラグビーだけでなく、ラグビーを通して夢や仲間の大切さを伝えます

ラグビーの価値向上とさらなる発展

クボタスピアーズ

GM　石川　充

この度は日本ラグビーフットボール協会創立 90 周年、誠におめでとうございます。

心よりお慶び申し上げます。

弊社ラグビー部は 1990 年のクボタ創業 100 周年を機にラグビーをカンパニースポーツと位置づけ、従業員の士気の昂揚と一体感の醸成の役割、併せて当社のイメージの明確化を目的として強化が始まりました。

「オールクボタ」的な旗印を掲げ、統一のシンボルを共有することで、従業員の帰属意識の向上とラグビーの持つ「One For All,All For One」の精神が、弊社のものづくりの精神に必要不可欠であること、またあらゆるスポーツの中でラグビーが最もチームワークを必要とされることが、カンパニースポーツとして選ばれた理由であります。

【ラグビー部創部当時の様子】

1997 年に関東 1 部リーグで優勝し、東日本リーグへ昇格、初の全国大会初出場を果たしました。その後、2002 年東日本リーグ 4 位という戦績を残し、翌年から始まるジャパンラグビートップリーグ（以下 TL）入りを決め、発足時から参加チーム（12 チーム）に名を連ねることができたのは今でもチームにとって大変名誉なことであります。

TL 参加チームの条件であったチーム名称は「クボタスピアーズ」としましたが、〝スピアーズ〟には槍のように鋭いアタックと相手に突き刺さるタックルの両方を兼ね備えたチームになりたい、という思いが込められております。

TL 初年度である 2003 ‐ 2004 シーズンには 8 位に食い込み、次年度以降も 6 位、8 位、8 位、6 位と強力 FW を前面に押し出した激しい戦いとスピードある BK、強固なチーム DF を武器としトップリーグの活性化に貢献してこれたのではないかと自負しております。

なかでも、2005 ‐ 2006 シーズンのプレーオフ・マイクロソフトカップ（当時）でリーグ戦 2 位だった三洋電機ワイルドナイツ（現パナソニック）を雪の降り積もった秩父宮ラグビー場で破りベスト 4 に進出した事や、2009 ‐ 2010 シーズンの開幕戦 3 連勝を上げ（NEC グリーンロケッツ、ヤマハ発動機

ジュビロ、神戸製鋼コベルコスティーラーズ）、8 勝 5 敗と勝ち越し 6 位になったシーズンはクボタスピアーズの歴史の中でも最も輝かしいハイライトです。

【2009 ‐ 2010 シーズン】

西京極球技場にて、神戸製鋼コベルコスティーラーズに 16 － 15 で勝利し、開幕から 3 連勝を飾る。

一方で、2010 ‐ 2011 年には TL13 位となり、トップイーストリーグ（当時）への自動降格という大変厳しい時期も経験し、TL 復帰まで 2 年の歳月を費やすことになりました。私たちは TL という舞台がいかに素晴らしい場所であるか、そして継続して所属することがいかに難しいかということを正に身をもって知ることができた時期であったと言えます。

TL 復帰後の 2013 ‐ 2014 シーズン以降、上位チームから金星を上げることもあるものの、安定して実力を発揮することができず 9 位、13 位、12 位と下位から脱却をできずにいました。

その現状を打破すべく中長期的な強化策を策定し、有力な日本人選手の獲得や外国人選手の補強、クラブハウス増設によるトレーニング設備の充実を図り、2016 ‐ 2017 シーズンには南半球スーパーラグビーで南アフリカのブルズを率いて 2 回優勝経験のあるフラン・ルディケ氏をヘッドーコーチに招聘し、TL ベスト 4 さらには悲願の日本一に向けてチーム強化に取り組むとともに、チームカルチャーの構築と矜持を持ち続けるために「スピアーズウェイ」の策定・浸透に取り組んでいる最中です。

現在、2019 年ラグビーワールドカップ日本開催、2020 年東京オリンピックを目前に控え TL 参加チームの役割はただ単に試合に勝利する「強さ」のみの追及だけではなく、地域貢献活動、ラグビー普及活動、人材育成など多岐に渡っています。

このような現状の中、クボタスピアーズとしましても、日本代表の主将を務める立川理道を始め、さらに一人でも多くの日本代表選手を送り出すことができるように選手の育成とチームの強化に努めていくとともに、選手・スタッフがラグビーを通じて社会に貢献し、周囲から評価されるような人間へと成長できるような取組みを継続して行っていき、日本ラグビー界を牽引する TL 加盟チームの一員としてラグビーの価値向上とさらなる発展に寄与していきたいと考えております。

【東京都春の交通安全キャンペーン】

【千葉県船橋市立高根小学校　タグラグビー教室】

末筆ながら日本ラグビーフットボール協会のさらなる発展を祈念いたしまして、結びとさせて頂きます。90 周年おめでとうございます。

サンゴリアスの強化が
日本代表の強化に繋がっていくと信じて

サントリー
サンゴリアス
ラグビー部長　中江嘉宏

この度は日本ラグビーフットボール協会90周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。

その長い歴史のなかでも2003年ジャパンラグビートップリーグの立上げは現在の日本ラグビー界へ、とても素晴らしい影響を与えた1つだと思っております。

私たちは2003年より、日本最高ジャパントップリーグへ毎シーズン参加できていることを誇りに思います。

その中で厳しいシーズンもたくさんありましたが、チーム一丸となり逆境を乗り越えながら、これまで4回のタイトルを獲得できたことは本当に嬉しく思います。

私たちはチャンピオンになることは勿論ですが、「人と自然と響きあう」という企業理念に基づき、ラグビーを通して「人と響きあう」ことを目指し、ラグビー普及活動をはじめ、

社会貢献活動、次世代育成活動も同時に行ってきました。

本拠地でもあります府中市とは、クリニックや地域貢献活動などを定期的に行っております。また府中市には良きライバルチームでもあります東芝ブレーブルーパスがあります。

試合ではいつも激しく戦いますが、グランドを離れれば一緒に協力しながら、府中市の活動に参加するなど大変良い関係にあります。これもまたラグビーの素晴らしい文化ではないでしょうか。

また2015年より一般財団法人港区ラグビーフットボール協会と提携し次世代育成、ラグビー普及などを中心に様々な取組みを実施してきました。行く先の見えにくい社会情勢のなかで企業スポーツが継続的に活動できるような仕組み作りも継続して追及していかなくてはなりません。

この先トップリーグが20年、30年と続き、その中で我々は常に日本一を争えるチームであり続けるように頑張っていきます。

そしてサンゴリアスの強化が、その先のサンウルブズ、日本代表の強化に繋がっていくと信じ、引き続き精進していきたいと思います。

これからもますますのご繁栄を祈念しております。

無垢な熱と純粋な気持ち
私たちの挑戦に終わりはない

セコムラガッツ

ラグビー部チームプロデューサー
小谷　健志

日本ラグビーフットボール協会 90 周年、ならびに「ジャパンラグビートップリーグ」15 年の節目に際して一言お祝いの言葉を述べさせていただくとともに、私たちセコムラグビー部の歩みを振り返ってみたいと思います。

セコムラグビー部、セコムラガッツは 1985 年 5 月に創部。埼玉県狭山市にホームグラウンドを構え、関東社会人 4 部リーグから出発しました。そして 2003 年、名立たる強豪チームが参入を目指した「トップリーグ」元年の栄えある 12 チーム、そのオリジナルメンバーになることができました。いま思えば創部以来、猪突猛進でがむしゃらに戦ってきましたが、入替戦で伊勢丹を破り、東日本社会人リーグに初昇格したのが 1999 年。2002 年の全国社会人選手権、雨中の秩父宮でコカ・コーラウエストジャパン（当時）を 26 － 19 で下したのが全国大会初勝利でした。いきなり「トップリーグ」という最高峰の舞台で戦っていくための準備としては、少々助走期間が足りなかったようにも思えます。

初年度の「トップリーグ」では元日本代表で、セブンズ日本代表コーチの経験を持つ加藤尋久氏（現・青山学院大監督）をヘッドコーチに招聘し、ラガッツというチームのスタンダードを作るところから始めました。開幕から 6 連敗を喫するなど序盤こそ苦しみましたが、2013 年 12 月 13 日、秩父宮ラグビー場。前年度日本一の NEC グリーンロケッツを 37 － 10 で破り歴史的勝利を挙げると、そこから福岡サニックスボムズ（当時）を 34 － 28、クボタスピアーズを 28 － 24 で下し破竹の 3 連勝。一時は 9 位にまで順位を上げました。残念ながら最終順位は 11 位でリーグ自動降格となりましたが、翌年の「トップイーストリーグ」で全勝優勝、「トップチャレンジシリーズ」で豊田自動織機に 24 － 17 で勝利し、1 年で返り咲きを果たしました。ラガッツは 2003 年、2005 年、2006 年と計 3 シーズンを「トップリーグ」で戦いました。

特に思い出深いのが 2003 年の「トップリーグ」元年のシーズンです。ロックの生沼元選手は外国人選手の多いポジションで切磋琢磨しながら 7 試合に出場。神戸で行われた三洋電機ワイルドナイツ（当時）戦では見事なトライも記録しました。また、日本 A 代表で当時不動のレギュラーとして君臨していたプロップの山賀敦之選手（現・総監督）を押し退け、東芝府中ブレイブルーパス（当時）との栄えある開幕戦でスタメン出場を果たしたのは当時入社 2 年目の成長株、千巌和彦選手でした。運動量は豊富ながら、スクラムに課題を持っていた千巌選手ですがこの年 9 試合に出場し台頭、リーグ戦を通じて大きく成長しました。

いま回想しても胸が締めつけられる思いですが、生沼選手は現役トップリーガーのまま 26 歳で、千巌選手は現役引退からわずか 3 年後の 34 歳の若さで病に倒れ、天に召されました。残された私たちは、この二人の十字架を背負いながら前を向いて生きています。どこかで見守ってくれている心強さと、その一方で二人には恥ずかしい姿は見せられないという衝動に突き動かされます。

時の移ろいは早いもので「トップリーグ」ができて 15 年、ラガッツが表舞台から姿を消して 10 年になります。このリーグの誕生とともに、私たちはジェットコースターのような歳月を過ごしてきました。2009 年 2 月 10 日、会社からラグビー部の強化打ち切りが発表され、チームは解体、事実上の廃部となりました。前年は「トップリーグ」復帰を目指しながら「トップイーストリーグ Div. 1」で 5 勝 4 敗の 5 位と伸び悩みました。その背景には、ラグビー界の世界的なプロ化の流れが進み、日本国内もその波に飲み込まれていく中で、社業と競技の両立を掲げ、アマチュアリズムを標榜するチームの存在意義が徐々に保てなくなった点にありました。

なんとか火を絶やさぬように。会社の強化指定を失い自主活動になってもラガッツは歩みを止めませんでした。「トップリーグ」という存在は遥か彼方へと遠のきましたが、1 年 1 年、自分たちの足で居場所を見つけ出し、いつか、もう一度陽のあたる場所へ帰りたい。創部 30 周年を数え、とうとう「トップリーグ」を知る選手は石橋秀基選手ただ一人になりました。それでも OB の口から歴史が語られ、選手から選手へと思いは受け継がれていきました。そして 2016 年、ラガッツは会社のシンボリックチームに認定され、再び会社の支援を勝ち取ることができました。

苦節 8 年、いよいよ今季がリスタートとなります。その間の「トップイーストリーグ Div. 1」での通算成績は 6 勝 52 敗。長く険しい道程でした。2019 年、2020 年に迫りくる国際的なスポーツイベントがその一因となって環境を後押ししたことは確かです。それでもこうして今日、セコムラガッツが存在している最大の要因は、ここのいる部員たちの無垢な熱であり、ラグビーを愛する純粋な気持ち、それが一番の宝物なんじゃないかと考えます。

いつか、もう一度トップリーグに返り咲く日が来るならば。私たちの挑戦に終わりはありません。これからも日本ラグビー界にとって、なくてはならない存在でありたいと思います。

原点に立ち返ったチーム作りを着実かつ大胆に

トヨタ自動車ヴェルブリッツ

ラグビー部長　宗雲克美

トヨタ自動車ヴェルブリッツにとって、15年目を迎えるトップリーグの過去14年を振り返ることは、決して心躍るものではない。トップリーグ発足当時、トヨタ自動車は全国社会人大会で優勝５回、日本選手権でも優勝３回を数え、満足できる実績ではないものの、会社従業員のみなさんや地域住民の方々には誇りに思っていただける存在だった。

1941年創立以来の長い歴史を持ち、「トヨタの運動部といえばラグビー部」という存在だったと思う。

2002年５月、全国規模のトップリーグであるジャパンラグビートップリーグの発足が発表された。

1998-1999年シーズンには久々に全国社会人大会で優勝、2000-2001年シーズンにも準優勝を果たした記憶もまだ新しく、多くの方々からこの最高の舞台での活躍、そして優勝に強い期待を寄せていただいた。

しかし、トップリーグ初年度の結果は、考えられる限りで最悪のものだった。負けたのではない。

参加できなかったのだ。2002-2003年シーズンは関西社会人リーグで３位にとどまり、日本選手権でもプール戦４位に沈んで、トップリーグ参加12チームの枠に入ることがかなわなかった。

優勝どころか、試合に出ることすらできない。とにかく情けなく、会社や社内外のファンのみなさんに申し訳ない気持ちでいっぱいだった。その悔しさをばねに、初年度のトップウェスト、トップリーグチャレンジシリーズをともに１位で勝ち抜いて翌シーズンにはトップリーグに昇格、１年遅れでスタートラインに立った。そして４位となり、一応の結果は残して、今後に手ごたえを感じた…はずだった。

ところが、その先の壁は厚かった。そこからの戦績は４、４、３、８、４、３位。

主力の故障に泣いた2008-2009年を除けばプレーオフ進出は果たしたものの、最高成績は３位にとどまり、頂上決戦にはたどりつけないという歯がゆい成績が続いた。そして、2011-2012シーズンに入れ替え戦目前の10位に沈んで以降は、５、６、６、５位と、５位に入るのがやっとで、プレーオフには出ることもできないという不本意な状態に陥ってしまった。

日本のラグビー界全体をみれば、周知のとおり2015年にイングランドで開催されたワールドカップの一次リーグプールＢで３勝をあげ、さらにオールジャパンで編成したサンウルヴズがスーパーラグビーに参戦、初勝利をあげるなど、この時期に大きな躍進をとげ、世間の注目を集めた。全国的にハイレベルな試合を増やし、日本ラグビーの活性化、競技力向上につなげるというジャパンラグビートップリーグの志は、2019年のラグビーワールドカップ日本開催に向けて、大きな実を結びつつあるように思える。それに対して、我々の現状はどうか。この間も、もちろん強化には継続的に力を入れていたのだが、トップチームとの差は開いていることを認めざるを得ない。ライバルチームは我々を上回る努力を重ねていたということだろう。

もちろんこの間、会社はリーマンショックの影響や大規模リコール問題が発生、東日本大震災やタイの大洪水による操業停止と、大きな苦難を繰り返し経験し、厳しい状況が続いた時期があった。リーマンショック後の大不況では、世間では企業スポーツからの撤退が相次いだ。

しかし、そんな中でも会社は「こんな時期こそ、強化運動部の活躍で社内に勇気と元気を届けてほしい」との考え方のもと、支援を継続してくれた。本当に、感謝よりない。また、ふがいない成績が続く中でも、社内外の多くのファンのみなさんには、厳しい叱咤とともに、熱い声援、温かい支援を寄せ続けて頂いた。こちらも、いくら感謝しても感謝したりない思いだ。そして、トヨタの強化運動部は、それに応えて次々と日本一という結果を出した…ラグビー部を除いては。ラグビー部だけは、トップリーグではベスト４にも手が届かず、わずかに2009-2010年の日本選手権で準優勝したのみという結果にとどまっている。

トヨタの社内では、従業員の士気を高めるべく、運動部の優勝シーンの録画が度々放映されるが、そこにラグビー部の姿はない。力不足を痛感する。

このままでは、プレーオフに出られないのが当たり前、というチームになってしまいかねない。

いや、「そうではない」と思っているのは、すでに自分たちだけなのかもしれない。ここで悪い流れを断ち切れなかったら、二度と上位を目指すことはできない、というくらいの恐怖感を覚えている。

遅きに失した感もあるが、これが最後の機会だと思う。トヨタラグビーは長い歴史を通じて健全なアマチュアリズムを堅持し、企業スポーツのあるべき姿を追求してきた。その理念自体は今日においても通用するものだと思うが、具体的な運営にあたっては、社是にもある「チャレンジ精神」に欠けていたことも否定できないのではないか。リーグ発足15年目を我々の改革元年と位置付け、先を行くライバルたちにもしっかりと学び、原点に立ち返ったチーム作りを着実かつ大胆に進めていきたい。

ラグビーフットボール協会が100周年の記念すべき年を迎えるころには、かつて先人たちが放っていた「優勝争いの常連」の輝きを取り戻し、日本のみならず世界のラグビー界を牽引する強豪チームの仲間入りを果たしたいと切に思っている。

３つの活動理念が土台に日本のスポーツ振興に寄与

ヤマハ発動機ジュビロ

ラグビー部長　北川　洋

日本ラグビーフットボール協会創立 90 周年並びにジャパンラグビートップリーグ創設 15 周年を心からお慶び申し上げます。

ヤマハ発動機ラグビー部は 1982 年に社内の愛好家たちによって結成された同好会から産声を上げました。当時、静岡県内にて開催されていたオレンジリーグから関西リーグに昇格し、関西Ａリーグ入りを目指して奮闘していた日々が昨日のようです。

2002 年度に悲願の関西Ａリーグを制覇し、新設された「ジャパンラグビートップリーグ（以下、トップリーグ）」に初年度から参加できたことはヤマハラグビーの歴史において誠に輝かしいものとチーム一同、誇りに思っております。

その初年度、参加する 12 チームに対し、「愛称」をつけるミッションが与えられました。社内では様々なアイデアが生まれ、愛称を決める議論を重ねました。その中で、当社にはヤマハ発動機サッカー部が一足先にＪリーグクラブ「ジュビロ磐田」として地域社会に溶け込んでいる好例がありました。そこで、ヤマハ発動機ラグビー部に「ジュビロ」の愛称をつけ、サッカーと共に「二つのジュビロ」として地域スポーツの振興に寄与していこうとチーム愛称を「ヤマハ発動機ジュビロ」としました。幸いにも日本プロサッカーリーグからも共有の愛称を認めていただき、2003 年度の開幕に間に合った経緯があります。

Ｊリーグクラブと愛称を共有するほかに、もう一つ新しい試みを行いました。それまでは「ジュビロスタジアム」としていたスタジアム名を「ヤマハスタジアム」と改名し、サッカーとラグビー共有のフットボールスタジアムとして活用したことです。

2003 年 12 月 7 日、快晴のヤマハスタジアムには約９千人もの来場者が集まり、サントリーサンゴリアスを迎えてのトップリーグ公式戦が行われました。それまでは東京や大阪など、協会手配による試合会場にて試合

に出場するだけの役割でしたが、この試合を皮切りに、主管の静岡県ラグビー協会と共にチームとして試合運営に協力することになりました。この試みは選手たちが地域をより強く意識し始める良いきっかけとなりました。

それから 14 シーズン、選手たちは常にトップリーグという日本最高峰の舞台に立ち続け、見ごたえあるプレーで来場者を魅了しています。運営スタッフは主管協会の方々と共に安全を第一とするスタジアム運営を続けております。また、地域のスポーツ振興とラグビー普及を目的に設立したヤマハ発動機ラグビースクールも 10 年を越え、毎年約 350 名もの生徒たちが緑の芝生の上で楕円のボールに親しむ場となっております。

これらの活動の根幹には当社ラグビー部が大切にする３つの活動理念が土台となっています。「ラグビーを通して、従業員の一体感を醸成する。」「心身ともに健康で且つバランスの取れた有能な人材を育成し企業活動に貢献する。」「スポーツの普及促進と地域活性化のため、地域社会と交流する。」この３つの基本理念がお互いを支えあう形で一つの柱となり、地に足のついた活動として今日まで継続できているものと自負しております。

おかげさまで当社ラグビー部も創部 30 年を越えました。これもひとえに日本ラグビーフットボール協会をはじめとする各ラグビー関係者の皆様からのご指導の賜物であり、社員と地域からの理解あっての歴史であると認識しております。

この先も３つの活動理念のもとにラグビー活動を継続し、静岡県を基盤にしながら、日本のスポーツ振興に寄与して参りたく存じます。引き続きご指導ご鞭撻のほど賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

世界を身近に感じるトップリーグ昇格

横河武蔵野アトラスターズ

佐藤　幸士

（公財）日本ラグビーフットボール協会創立 90 周年誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

ジャパンラグビートップリーグ創設 15 年を迎え、このトップリーグの立上げこそが近年の世界を舞台にした日本ラグビーの活躍につながるものであったと切に感じており、2019 年のワールドカップ日本開催、2020 年のオリンピック・パラリンピック東京開催を控えた現在、今後ますますトップリーグやさらに高いレベルのリーグでの活躍を志す若人が増え、日本のラグビーがこれまで以上の進化を遂げることを願ってやみません。

横河電機ラグビー部は 2016 年に創部 70 年を迎えました。歴史を振り返れば、全国社会人大会 12 回出場という実績のなかで、日本代表として世界を相手に戦う選手や指導者を数多く輩出してきたと自負しています。創部以来、「企業人として社業とラグビーの両立を目指しながらトップチームとして存在し続ける」という精神で活動を続け、現在も文武両立のなかで日々精進しています。

ジャパンラグビートップリーグが 2003 年にスタートした当時、横河電機ラグビー部はトップイーストリーグで戦っていました。戦績もなかなか振るわず、とてもトップリーグを志すようなチーム状況ではありませんでした。

そのような状況のなか、当時の代表取締役社長 内田勲が、“ すべての始まりは 思うこと ” として「我が伝統ある横河電機ラグビーはトップリーグで優勝する！」と高らかに声を上げ、2005 年から本格的なチーム改革に取り組んだ結果、2007 年シーズンにはトップイーストリーグで全勝優勝を成し遂げ、トップチャレンジマッチも勝ち抜いて、悲願であったトップリーグ昇格を果たすことができました。その際に、「地域に根差し、地域の皆様に応援いただけるチーム作り」を目指してチーム名を【横河武蔵野アトラスターズ】としました。

当時のことを振り返ると、トップリーグに昇格することができた最も大きな要因は、チームを指揮したコーチ陣が「本気で昇格を目指す！」と〝強い信念をもってチームをまとめあげたこと〟や、新たにチームに加わった経験豊富な選手達によって多くの刺激を受けたメンバー一人ひとりが〝個々の意識を大きく変えたこと〟などによって、チームとしての日々の取り組みの大きな変化・変革につながったことであったと思います。

トップリーグで戦った一年は、我々にとって大変素晴らしいものでした。

強豪国の代表として世界を舞台に活躍している選手、強豪国に勝つことを目標として戦っている日本代表選手、日本代表入りを目指して努力を重ねている選手、〝そんな選手達と真剣勝負ができる喜び〟はこの上ないものでした。

また同時に、彼らの豊富な経験に基づく人格やパフォーマンスに直接触れることで世界を身近に感じることができ、大変多くのことを学ぶ場でもありました。

トップリーガーたちが日々鍛錬に励み、ラグビーというスポーツを通じてスポーツマンシップを学ぶことで人格を高めていく。また、そんなチーム・選手達に感化され、トップリーガーに憧れる若人たちが努力を積み重ね、リーグに新しい風を吹き込みながらリーグ自体も活性化していく。そして日本ラグビー界が活気にあふれ、そのレベルもどんどん高まっていく。ジャパンラグビートップリーグとはそんなスパイラルアップを実現する最高の舞台であると思っています。

我々は今後も常にトップリーグを志し、また近い将来、あの輝かしい舞台で活躍できる日が来ることを夢見ながら日々邁進していきます。

最後に、我々横河武蔵野アトラスターズはジャパンラグビートップリーグの益々の発展を心から祈念するとともに、今後の日本ラグビーがさらなる栄光への道を突き進んでいくことを全力で応援いたします。

改修工事のため花園で試合が出来ない２年間 満を持して凱旋できるようトライ続ける

近鉄ライナーズ

日本ラグビーフットボール協会 90 周年おめでとうございます。長きに渡り競技振興に尽力してこられた諸先輩方に改めて敬意を表しますとともに、その歴史の一翼を担えることを光栄に思います。

一方で、再来年には、我々近鉄ライナーズが本拠地としている花園ラグビー場が 90 周年の節目を迎えます。これは、奇しくもラグビーワールドカップ 2019 が開催される年でもあり、目下、それに向けた改修工事が進められているところです。

この工事が行われる２年間は花園を使った公式戦が出来なくなるため、昨年度の最終戦は格別の想いを持って臨みました。怪我人の多さに悩まされた不本意なシーズンの締めくくりは、7 季ぶりの入替戦でした。トップリーグの意地とプライドを示そうと、前半 10 分までに２度もインゴールに飛び込むものの、いずれも TMO でノートライになる不安な立ち上がり。それでも慌てず着実にスコアを重ね、終盤には相手ウィングの独走を許すも、懸命の追走と連携した防御で防ぎきって完封勝利を収め、トップリーグに残留することが出来ました。

ジャパンラグビートップリーグは今年 15 年目を迎えますが、我々近鉄ライナーズとしては 12 回目のシーズンにあたります。2003 年の開幕年は入替戦で残留できましたが、翌年には自動降格の憂き目に遭いました。会社のバックアップを得て強化体制を見直し、早期復帰を期したものの、ここ一番に勝ちきれず３年を要してしまいました。この時期のファーストジャージを見れば、スクラムのロゴがない左袖に、寂しさと同時に身が引き締まる思いがします。しかし、この苦しい時期にあえてライナーズを選んで入団して来た選手達が、いまだに中心選手として多数活躍していることはチームの大きな財産となっています。また、現役のまま天国に旅立った中井太喜選手のことも忘れられません。ピッチでは寡黙でチームのために体を張り続けた彼は、最後の最後まで一切の弱音を吐かず病魔とも闘い抜きました。誰からも愛され信頼された勇敢なハードタックラーは、わずか２年の在籍ながら、ライナーズに魂を残してくれました。

12 回目のトップリーグ参戦は喜ばしいことですが、ホーム花園が使えないという寂しさや不安もあります。ご存知のとおり、花園ラグビー場のある東大阪市は「ラグビーのまち」を掲げています。職員はオリジナルのラガーシャツでクールビズを過ごし、原付自転車にはオリジナルの楕円型ナンバープレートが交付されています。もちろん、マンホールはラグビーワールドカップ仕様。また、市内にはラグビースクールが３校もあり、いずれもトップリーガーを多数輩出しているという土地柄です。『東大阪には「城（しろ）」のかわりに「場（じょう）」がある。ここは（ラグビー）場下町（じょうかまち）だ』と言う人もいるそうです。そんな町の誇りを本拠地とするライナーズへの期待は大きく、熱い応援をいただいてきました。他会場とは異なる独特の雰囲気。目の肥えた（？）ファンからの河内弁丸出しの声援や、今はお行儀良くなった（？）応援団からの愛と夢のある激励。これらを味方につけてきた我々ライナーズは、大きなアドバンテージを失うのかもしれません。

改修工事のため花園で試合が出来ない２年間は、これまでの恵まれた環境に改めて感謝しつつ、地元で雄姿を見せることは出来なくても期待を裏切らない活動を続け、満を持して凱旋できるように取り組んでいく所存です。ワールドカップが日本にやってきて、花園にもあの熱気が押し寄せるであろう 2019 年は、我々ライナーズにとっても 90 周年の節目の年です。ここに向けたチーム再生を、この 12 回目のトップリーグ参戦から始めて参ります。是非ともご期待ください。

無論、これまで活動を続けてこられたのは、サポーターの皆様のご声援に加え、トップリーグ各チームとの切磋琢磨があったからです。中でも、長年にわたって定期戦を続けてくれたり、節目ごとの招待試合に遠征して来てくれたり、下部リーグに落ちていても胸を貸してくれた各チームのご協力を忘れることはできません。関係各位に改めて御礼申し上げますと共に、これからも一層のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げる次第です。

再び「九州魂」を全国に披露する時まで チャレンジを続けていく

九州電力キューデン ヴォルテクス

何度となくはね返されてきたトップリーグへの扉がついに開かれたのが 2007 年 1 月。

トップチャレンジマッチで三菱重工相模原と近鉄ライナーズを下し念願のトップリーグ昇格を決めた。

創部 1951 年から日本一も経験し、九州ラグビーの顔、歴史と伝統のチーム。それだけに「早くトップリーグに！」という周囲の思いも強かった。チャレンジし続けた 5 年間、全員で掴み取ったトップリーグのステージは、新たな歴史の始まりでもある。

感情の激しさ･熱狂、技術･技能を持つチームにと、「九州電力キューデンヴォルテクス」とチーム名を改め、初めてのトップリーグの戦いは始まった。

1 年目の 2007 － 08 シーズン。正々堂々と戦いトップリーグに貫かれた「九州魂」。4 勝 9 敗と大きく負け越したが、トップリーグ昇格初年度を 14 チーム中 10 位の成績で終えた。また、九州所属チーム 3 チームに対して与えられた「功労賞」とともに、「フェアプレー賞」を受賞し、翌シーズン以降も更なるステップアップを期待させるシーズンとなった。

しかし、トップリーグ 2 年目の 2008 － 09 シーズン。基本スキルを高め「7 位以内」を目標に戦ったシーズンは前年度 3 位のトヨタ自動車ヴェルブリッツにホームのレベルファイブスタジアムで勝利するも 3 勝 10 敗、3 年目の 2009 － 10 シーズンでは、残り 2 節を残して自動降格が決定。13 戦全敗の最下位となりトップリーグ昇格後、たった 3 シーズンで降格を味わうことになった。

1 年でのトップリーグ再昇格を誓った 2010 － 11 シーズン。ヤマハ発動機ジュビロとの入替戦を行い 10 対 12 と一歩届かなかった。

2007 年（トップリーグ元年時）の試合中

2009 年（トップリーグ 3 年目）の試合中

強力外国人・有望な新人選手の補強が成功した 2011 － 12 シーズンでは、トップチャレンジ 1 － 2 節終了時点でトップリーグ昇格を決めたキャノンイーグルス以外の 3 チームに昇格の可能性が残されており、ヴォルテクスは 1 位通過のキャノンイーグルス相手に 39 点差・4 トライ以上の勝利が昇格の絶対条件。この日のヴォルテクスに迷いはなく、速く・激しく・前へ出続け、タックルもパスもアタックも、一つずつ決める度にトップリーグ昇格が近づき、68 対 17 の見事な勝利で 2 度目のトップリーグ昇格を決めた。

3 シーズンぶりのトップリーグであったが、2011 年 3 月の東日本大震災以降、業績が悪化しチーム強化もままならず、2012 － 13 シーズンを 2 勝 11 敗の 12 位、16 チーム制となった 2013 － 14 シーズンでは 1 st ステージ全敗、2 nd ステージもトップリーグ残留がかかった勝負どころで勝ちきれず、2 勝 5 敗のシーズン 16 位となり 2 度目のトップリーグ自動降格となった。

2013 年（トップリーグ 2 年目）の試合中

これを機に、2014 － 15 シーズンから外国人選手の在籍がなくなり、純和製チームで 3 年連続トップリーグチームに入替戦で挑戦し、一度同点で昇格を阻まれた以外は、トップリーグチームの高い壁に跳ね返され続け、今を向かえている。

日本人選手だけでトップリーグ昇格は不可能ではないだろうが、トップリーグ定着は不可能に近いと言われても、業績が回復するまでチャレンジを諦めるつもりはない。

2017 － 18 シーズンを監督として率いるのは、10 年前にトップリーグ昇格を果たし、トップリーグでのキューデンヴォルテクス最高成績を収めた際のキャプテンで抜群のリーダーシップを誇った川嵜 拓生。

2007 年と 2012 年の昇格時の感動、そして過去 10 年で 5 年間のトップリーグでの戦いを定着させていくために。

再び「九州魂」を全国に披露する時まで、キューデンヴォルテクスはチャレンジを続けていく。

2012 年のキャノン戦大勝時の記念撮影

日本ラグビー全体の底上げに全面的に協力

宗像サニックス
ブルース
ラグビー部長兼監督
藤井　雄一郎

2003年にトップリーグが発足してから、今年で15年目を迎えるということ。月並みな表現かもしれませんが、月日が経つその早さに驚くしかありません。何よりもまず、日本ラグビーフットボール協会創設90周年と併せ、トップリーグ15年目を、一つの節目として迎えられた、すべての関係者の皆様のご功績を称え、心よりお祝い申し上げます。

幣部は、トップリーグ元年の2003年にトップリーグに参加しましたが、12位という成績で降格。その後も2度、トップリーグからの降格を経験しましたが、3回ともすべて、一年で再昇格することができました。自分たちの歩みを振り返ってみると、日本ラグビー最高峰のトップリーグというものが発足してくれていたからこそ、私たちのように比較的歴史が浅く、小規模なチームであっても、歴史ある強豪チームに追いつき追い越せという強い意志で強化を積み重ね、何度転んでも、そこからしっかりと立ち上がり、少しずつでも着実に成長してくることができたように思われてなりません。

トップリーグ発足からの14年間で、幣部の名称は、福岡サニックスボムズから、福岡サニックスブルース、さらには、宗像サニックスブルースと変わってきました。その名称の変更は、単なる名称の変更ではなく、私たちのレゾンデートル、つまり、私たちが何を大切にし、何に根ざした存在であるかを明確にしていくなかで生まれたものだと言うことができます。地元・宗像市に根ざすチームとして、地元の皆様に愛され、支えられるチームとして大きく育っていきたいという私たちの願いを、これからも、決して忘れず、歩んでいきたいと思います。トップリーグにおいて、私たちが行った試合のなかで、2006年のNEC戦勝利、2008年の神戸製鋼戦勝利は、「ジャイアントキリング」と名付けられた試合として強く印象に残っていますが、それ以上に、昨シーズン、地元宗像のグローバルアリーナで、強豪東芝を破った試合は、地元ファンの方々に、心から喜んでいただけた、チームとして忘れられないベストゲームとなりました。これからも、宗像での勝利というものは、私たちにとっては大きな意味を持つことになるでしょう。

最後になりますが、前回のW杯で、日本代表が南アフリカを相手に歴史的勝利を収め、サンウルブズがスーパーラグビーに参戦し、日本ラグビーの強化が着々と進められているなかで、トップリーグの重要性は益々高まっていくに違いありません。そうだとすれば、それぞれのカテゴリーが勝手に動くのではなく、互いに協力しあって動いていくという方向性は、これまで以上に大切だろうと思われます。まずは、トップリーグに参加する各チームが、自らのレゾンデートルをしっかりと認識し、それぞれの役割をしっかりと果たし、日本ラグビー全体の底上げに全面的に協力していくということ。同時に、世界最高峰のスーパーラグビーの試合を直に日本で観る機会が増えたのですから、そこからも、トップリーグが積極的に学び、必要なものを取り入れるということも大切なのではないでしょうか。どうしたら、もっと多くの人たちが、トップリーグの試合を観に行きたいと思うようになるのか、スーパーラグビーから学び、取り入れることをしなければ、本当にもったいないことだと思います。皆さんで力を合わせ、益々魅力的なトップリーグに変貌させていきたいと思います。

子供たちに夢を与え続ける
そして観ているファンに感動を与えるリーグに

神戸製鋼コベルコスティーラーズ

ラグビー部長　水上　孝一

公益財団法人　日本ラグビーフットボール協会創立 90 周年、誠におめでとうございます。

また「ジャパンラグビートップリーグ」も 15 年の節目を迎えられましたこと、心からお祝い申し上げるとともに、これまでリーグの発展にご尽力されてこられた協会役員、職員の方々をはじめ、関係者の皆様に深く敬意を表します。

全国の社会人チームの強豪が一堂に会し、高レベルな試合を増やし、日本ラグビーの活性化につなげる事を目的に発足したトップリーグでございますが、発足時の 12 チームから現在では 16 チームに増え、15 年の歳月を経て、歴史の積み重ねに思いを馳せると同時に、選手個々人の能力の著しい向上、世界のトップレベルが顔を揃えることで、リーグのレベルは年々上昇し、世界と伍して戦う力もついてきたと実感しています。それを表すように、ワールドカップ 2015 では世界も驚愕した、日本チームの躍進がありました。まさに日本ラグビーはトップリーグが支えていると言っても過言ではないでしょう。

また、各企業と協会とが両輪となって支え、様々な課題や問題点に一緒になって取り組んできたことも、リーグの発展に大きく寄与していることであります。

当社、神戸製鋼コベルコスティーラーズは、日本協会創立に遅れること 2 年、1928 年に創部しました。これまで大先輩方が残されたカルチャーを継承しつつ、鉄鋼会社で働く「鉄の男」というイメージと、我々が目指すラグビー選手像（Bodies of Steel，Hearts of Gold.）を「Steelers」という名前に託し、今日まで至っています。これまで日本選手権大会優勝 9 回、準優勝 4 回、トップリーグ優勝 1 回を数えます。日本選手権大会での 7 連覇は、新日鐵釜石（当時）とならぶ偉業であり、その名を日本ラグビー界に残したことは、大変な名誉なことであります。そしてトップリーグが産声を上げた 2003 年に初代チャンピオンに輝いたこともチームにとっては誇るべきものです。

初代チャンピオンになったこのシーズン、チームは 9 勝 2 敗の戦績でした。最終戦、地元神戸ウィングスタジアムで優勝が決まりました。あの時の歓喜はいまでも記憶に残っています。実はこのシーズン、1 敗のチームもあったのですが、勝ち点で上回っての優勝でした。前年までのノックダウン方式とは違い、4 トライ以上での勝利、また 7 点差以内での敗戦でボーナスポイントが与えられる方式に慣れていない中での優勝をいまになって振り返ると、勝ち点の重要性を改めて認識させられます。

トップリーグも群雄割拠の時代に入り、シーズン全般に亘り、タフな戦いが続いています。チームはこの 5 年、トップ 4 には入るものの優勝にはあと一歩及んでいませんが、我々の目的はトップリーグ初年度より遠ざかっている“チャンピオン”にほかなりません。エキサイティングなラグビーを披露し、覇権奪回に向け、チーム一丸となってこれからも邁進していきます。

またチームの強化はもちろんのことですが、私どもは発足当時からファンとの交流、サービスにも積極的に取り組んで参りました。ファンクラブの立ち上げ、毎試合会場でのファン目線でのイベントの開催、選手との交流の場の演出など、常にファンの側に立ったサービスを心がけてきました。その成果として「ベストファンサービス賞」の受賞 11 回という形で評価をいただいていますが、さらなるサービスの向上に努めたいと思っています。それが観客動員、ひいてはトップリーグの認知向上に繋がれば、これほど嬉しいことはありません。

これから 2019 年に向け、代表の強化も更なる加速をつけなければなりません。やはりその中心選手はトップリーガーであります。一人でも多くの代表選手を輩出することは、私ども企業の使命でもあると思っています。と同時に、トップリーガー、トップリーグはこれからの子供たちの夢の舞台でもあります。子供たちに夢を与え続ける、そして観ているファンに感動を与えるリーグになっていかなくてはなりません。そのためにも、より一層、協会と企業とが連携を取っていくことが不可欠です。

結びに、創立 90 周年という節目となる契機に、日本ラグビーフットボール協会のさらなるご発展と、トップリーグがこの先何十年も続く、安泰したリーグへと成長されますことを、心より祈念申し上げ、発刊に寄せる祝辞とさせていただきます。

トップリーグ初代優勝

世界に近づいた時代、圧倒された時代の
それを支えた選手やスタッフ、企業や協会に感謝

日本 IBM
ビッグブルー

1990 年代後半、関東 1 部リーグは正直レベルの高いリーグと言えるものではなかった。現在のようにラグビー部の活動が社業より優先されるような環境が整備されているチームは関西、東日本、九州の最上位リーグを含めても多くはなかったのではないだろうか。

日本 IBM でも平日練習には 10 名が集まれば良い方で、まともな練習ができることはほとんどなかったように思う。

週末の練習にしても、二日酔いで練習に遅刻してきては練習中に嘔吐することもしばしば。まともな状態ではなかった。

そんなチームではあったが、1998 年には元日本代表の洞口氏が監督に就任。練習への取り組みにも変化が現れた。会社に対しても練習に出られるよう働きかける者が増加し、これまでは社会性が欠落し学生気分の抜けなかったチームが大人になり、勝利への意識が芽生え始めたように思う。

しかし、チームの状態に変化が現れ始めた 1999 年に突然の訃報が襲った。洞口監督急逝。シーズンを目前にして、これからという時に指揮官を失った。

難しい状況ではあったが、この年の「監督はあくまでも洞さんであり、他の監督は置かない」と判断された。「このチームで関東 1 部リーグを優勝する！」と選手間で誓いを立てたシーズンは最終戦のセコムには敗れたものの、５勝１敗１分とグループリーグ２位となり、東日本リーグ入替戦に出場。この時の対戦相手は奇しくも新日鉄釜石だった。過去、洞口監督が在籍し７連覇を達成した釜石と、洞口監督が最後に指揮したチームがこの年に入替戦で対戦するということもあって、注目度は高かったように思う。結果は敗退し東日本リーグ昇格はならなかった。

この年の成績が評価され、翌年からはさらなる強化に乗り出す。ヘッドコーチに神戸製鋼７連覇の立役者でもある大西一平氏を招聘すると、会社内の環境を含めた大変革を行う。チームの活動を社業よりも優先すること、専用グラウンドを確保するなど環境を整えた。とはいえ、選手の中には反発もあった。ラグビーに対する思いは選手によって違うのが現実だった。〝負けても楽しくラグビーがしたい者〟と〝苦しくても勝ちたい者〟。残念ながら IBM ラグビー部には前者が多かった。いかにして前者を後者に変化させるか。

これが一番の難題だっただろう。

厳しい練習とラグビーに費やす時間の増加は選手それぞれの生活環境を変えたであろうと思う。私自身も大きく変化していく中で感じたことがある。

苦しい練習も仲間との言い争いも、勝てば全て報われる。結果として毎年メンバーが入れ替わる中でチーム内の意識は勝利への意欲にあふれていた。

目標を日本一と掲げ、それに向けてトレーニングに望む。2001 年に関東 1 部リーグで優勝しついに東日本リーグ昇格を果たしたもののリーグ戦では全敗を喫し、翌年から発足するトップリーグへの参加は果たせなかった。それでも、一度東日本リーグを経験したことが自信となり翌年のトップイースト 10 では他を圧倒して優勝。

トヨタ自動車との昇格決定戦でも敗れはしたものの接戦できるところまできた。結果的にトップリーグへの自動昇格を決め、2004 年にトップリーグに参戦する。

この年、ワールドに勝利するも結果は最下位で自動降格となる。２年前に東日本リーグで経験したトップチームとの対戦であったが、２年目のトップリーグではその時とは違う強さを感じた。各リーグの上位チームが社会人選手権や日本選手権に照準を当てていた当時と常に高いチーム力が必要になるトップリーグとでは、各チームの強化法も違い、リーグのレベルも格段に上がっていたのだろう。結果、IBM は多くの勝利を得ることなく昇格と降格を繰り返し、2008 年シーズンの自動降格決定後に強化縮小された。

これに伴い多くの主力選手が他チームへ移籍または引退し、残った選手は社業優先の中でクラブ化により選手を集め、ラグビー部存続のために活動を続けている。

一方で、社員選手はそれぞれが所属する部署で営業として好成績を残したり、管理部門でも職場で必要な人材になるなど、ラグビーで培ったアイデンティティを仕事に置き換え組織の一員として機能している。これはトップリーグとその後の困難を経験する中で得た経験が多大なる影響を与えているものと想像できる。

2015 年のワールドカップでの日本代表の活躍、ここ数年のトップリーグを観戦して感じることとして、選手が世界的スターを含む外国人選手に対しても怯むことなくコンタクトをするようになったことがある。トップリーグ発足当初はやはり、ニュージーランド、オーストラリアのスター選手やアイランダーたちの突破力に対する恐れを抱いていたし、そのレベルの違いを感じざるを得なかった。しかし、現在は体格においてもそうであるし、プレーにおいてもそれらの選手に引けを取らなくなっているように感じる。

トップリーグ発足から 15 年、この先の長い歴史を考えると創世記とも言えるこの 15 年は、日本ラグビーに変革を起こす重要なものであったし、これからも新たな取り組みを通じて 2019 年のワールドカップの成功とその先の未来に向けた基準となると思われる。ただ、世界に近づいた時代、世界に圧倒された時代のそれを支えてきた選手やスタッフ、企業や協会の努力があっての現在であり未来であることは忘れてはいけない。

未筆ながら、(公財) 日本ラグビーフットボール協会 90 周年と日本ラグビー界の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

トップリーグでの試合が貴重な経験、財産に

豊田自動織機シャトルズ

ラグビー部長　川口　真広

2017 年シーズンで 15 年目を迎えるジャパンラグビートップリーグに、シャトルズが参戦できる事を大変光栄に思います。

2003 年にトップリーグが創設されましたが、創設時シャトルズは下部リーグのトップウェストリーグからトップリーグを目指してスタートしました。

2003 年と 2004 年はトップチャレンジシリーズに出場し、あと一歩で自動昇格のチャンスもありましたが、トップチャレンジシリーズで勝ち切れず、トップリーグ入替戦で２年連続リコーさんと対戦して敗れ、トップリーグの壁に跳ね返されました。

その後、トップリーグ創設により下部リーグからトップリーグを目指すチームの強化が一段と加速する一方で、シャトルズのチーム力は低下し、2005 年～ 2007 年の３年間はトップチャレンジシリーズにも出場する事ができず、トップリーグ昇格が見えなくなるような苦しいシーズンを過ごしました。

2010 年トップリーグ開幕戦

2008 年に何とかチームを立て直し、トップチャレンジシリーズに出場して再度トップリーグ入替戦のチャンスを掴みましたが、勝つことができず、トップリーグの壁を破ることは出来ませんでした。

これまで何度もトップリーグの壁に跳ね返されてきましたが、2009 年のトップチャレンジシリーズで自動昇格を勝ち取り、トップリーグ創設８年目となる 2010 年シーズンでトップリーグに初参戦する事ができました。

トップリーグ初戦となる 2010 年シーズンの開幕戦は、地元豊田スタジアムに約１万人もの観客が詰めかけ、

大歓声の中、勝利を収めることができました。長い間トップウェストリーグで戦ってきたシャトルズにとって、記念すべきトップリーグ初勝利となりました。しかし、2010 年シーズンは残りの試合に全敗し、最下位（14 位・１勝 12 敗）で自動降格となり、トップリーグの洗礼を受ける形となりました。

１年でのトップリーグ復帰を目指し、2011 年シーズンをトップウェストリーグで戦いましたが、トップチャレンジシリーズで自動昇格を決める事ができず、そしてトップリーグ入替戦にも敗れて、トップウェストリーグで足踏みする事になりました。

2012 年シーズンは外国人選手の大型補強を行い、トップリーグへの再昇格を目指して取り組みました。当時、トップリーグは 2013 年シーズンからチーム数が増え 14 チームから 16 チームとなったことにより、自動昇格の仕組みが廃止され、入替戦で勝つことでしかトップリーグ昇格の道がないシーズンとなりました。これまで幾度となくトップリーグの壁に跳ね返されてきた入替戦を戦うことになりました。トップリーグ創設から９年間、トップリーグ入替戦で下部リーグのチームがトップリーグチームに勝って昇格した事はありませんでしたが、トップリーグ創設以来初となる、入替戦からのトップリーグ昇格を決める事ができました。

2016 年の東芝戦

２回目のトップリーグとなる 2013 年シーズンは、対戦方式も総当り戦からセカンドステージ制に変更されました。ファーストステージでは、上位チームに健闘するものの勝ち切れない試合が続きましたが、ファーストステージの最終戦で勝つことができ、トップリーグ通算２勝目を上げる事ができました。

セカンドステージは下位８チームによるグループ B に入り、初戦は落としましたが、その後の試合で接戦を勝ちきることができ、トップリーグで４連勝を飾る事ができました。

この結果トップリーグ２シーズン目の最終順位は 12 位となり、自動降格・入替戦を自力で回避し、トップリーグに残留する事ができました。

しかし、トップリーグで戦う事は甘くなく、翌年の 2014 年シーズンは最下位争いをする苦しいシーズンとなり、最終的には僅差で 15 位となり、辛うじて自動降格を回避してトップリーグ入替戦で残留を決めました。

2015 年シーズンはトップリーグがワールドカップ終了後に開幕するため変則的なシーズンで、２グループによるリーグ戦７試合と順位決定トーナメント３試合で順位が決まるフォーマットでした。ワールドカップでの日本代表の活躍により、今までにない注目度で開幕を迎え、その開幕戦で勝利することができ、その勢いもあってか、トップリーグ４シーズン目で過去最高順位となる 10 位でシーズンを終える事ができました。

2016 年シーズンはフォーマットが総当り方式に戻されましたが、開幕戦から連敗が続く苦しいシーズンとなりました。６連敗で迎えた第７節は地元ウェーブスタジアム刈谷で東芝さんとの対戦でしたが、ホームの応援の力もあって接戦に持ち込み、後半ロスタイムで逆転トライを奪って 27-22 で劇的な勝利を収める事ができました。

地元開催ということもあり、観客席がファンや社員で埋め尽くされる中で勝てたことは、本当に嬉しく今でも鮮明に記憶に残っております。

ウィンドマンス明けは２勝するものの、トップリーグ最終順位は 15 位となり、またしてもトップリーグ入替戦で残留を決める形となりました。

これまでトップリーグに５シーズン在籍しましたが、振り返りますとトップリーグに昇格するまでの苦闘があり、トップリーグ昇格後もなかなか簡単には勝てず、まだまだ辛うじてトップリーグに残留できているレベルですが、トップリーグ各チームの皆さんの胸をお借りする事によって、少しずつチームが成長してきたと改めて思います。やはりトップリーグで試合をさせていただく事が、チームにとって貴重な経験、財産となっています。

まだまだトップリーグでは若輩者ではありますが、日本ラグビーの最高峰であるトップリーグの競技力、人気の向上に貢献できるよう、今後もトップリーグ各チームの皆さんと切磋琢磨しながら戦っていく所存でございます。